

特集 人と生きる

いのちを考える



家族や愛犬と遊んでいると自然と笑顔になる

作者のことは

いのちの大切さ 考えた出来事

はなが死んだのは昨年(2022)の2月です。書きたいことがたくさんあって、初めは原稿用紙7枚になったから、一生懸命削りました。「悲しいって言葉を使わずに書いてみて」とママに言われて、自分の気持ちを考えながら書くのが難しかったです。

友達にはなの話を聞いてもらって、みんなのペットの話を聞いて、自分だけじゃないんだって思いました。はながいなくなってから、犬の飼い方の本を読んだり、教室で飼っているバツタの世話をしたりするのが好きになりました。今は、新しく迎えた「きよび」の世話をたくさんしています。きよびのトイレをきれいにし、散歩に行きます。おやつもあげます。周りの人に優しくして、自分を大事にして、きよびと幸せに生きていきたいです。



小学校1〜3年生の部 特選 はなが教えてくれたこと

玉川小学校3年 畑中瑞貴

二月十九日の朝、とつぜん電話がなりました。私はテレビを見ていたけれど、ドキッとてふりむきました。それは、電話に出たお母さんがなきたからです。よこはまのびょういんに入り込んでいたか、犬のはなが死んでしまったという、先生からの電話でした。私たちは、あわててびょういんへ向かいました。車の中では、これから何がおきるのか、とてもふあんでした。びょういんにつくと、ソファのあるへやに行きました。長い間まわっていると、白いぬのにつまはながつられてくれました。青いお花のワッペンでかざられていて、はながんはつたし、よこはまのびょういんに死んでしまったと、お母さんも、

に犬が出てくるとすぐけすようになりました。さん歩で犬とすれちがうこともできませんでした。元氣な犬をかつている人がうらやましくて、たまらなかつたです。いくらのはなが帰ってきてほしいと思っても、はなが帰ってきません。世界中どこをさがしても、はながはいません。その時、うちだけずうっと冬みたいでした。家の前には大きいきくらの木があります。はなとお花見するのを楽しみにしていました。さくらがさくころにはながいないなんて思っています。学校の帰りに、友だちのお母さんに会いました。犬のさん歩をしていました。そして、ミニチュアシナウザーのレイくんをなでさせてくれて、はなの話もいっぱい聞いてくれました。私は心がすっきりしました。それから、ねこをかつている友だちにはなの話を聞いてもらうこともありました。ペットのハムスターを亡くした友だちとお話して、「気持ちがかかるなあ。」と、思うこともありました。そして気分がわるくなったり、少しずつ前向きになつたりしました。

「はな、ごめんね。」と、何でも言いながら泣いていました。お父さんは、何も言わずにはなをだいていました。はなは、ねている時のような顔でした。体はつめたかつたです。それは、たましいがぬけているからだと思います。はなは本当に死んでしまったんだと感じました。(中略)はなが死んでからお母さんは、とつぜん泣いてしまうことがありました。お父さんも、遊び相手がいなくてさびしがりやになりました。妹は小さくてまだ分らないようでしたが、はなの絵をたくさんかいていました。

新しい犬をむかえようと決めたのは、さくらのさくころです。一ぴきでもくるしんでいる犬を助けたいと思い、ほこ犬をかうことにしました。毛色ははなに似ていて、こげ茶と白の毛がかわいいです。名前はきよびです。私ははなを亡くして、いのちの大切さをまなびました。まわりの人やきよびにやさしくすること、自分を大事にすることが、いのちを大事にするということなんだと思います。



新しく迎えた保護犬の「きよび」と畑中さん

はなを火そうする前の日、私は五時間目に頭がいたくなってきました。家に帰れば治ると思ったので、いつも通り帰りました。でも、家につくとお母さんが泣いてきて、何でもトイレで泣きました。し

「私が死んじゃったから悲しくないで。」という、はなからのプレゼントだったのかも。それに、皆さんのことを教えてくれたはなに、ありがとうと言いたいです。



大好きなペットと別れた時、戦争を知った時、初めて命について考えた小学生がいます。小・中学生の詩や作文、短歌などを表彰する和田傳文学賞の昨年度受賞作品から、いのちにまつわる作文を紹介いたします。

市HPに全文を掲載

広報あつぎ 検索

和田傳文学賞

名誉市民であり作家の故・和田傳氏の遺志による寄付金で創設した基金を基に1986年から開催。昨年度は142作品の応募があった。教育指導課 ☎225-2675

小学校4〜6年生の部 入選 戦争を知らない私

鷹尾小学校6年 小林愛佳

(前略)八月に入ってからすぐのある日、テレビを見ていたら戦争の特集番組をやっていた。日本は世界で唯一の戦争被ばく国であることや、今年で戦後七十七年になる事などを話していた。「日本は、唯一の被ばく国なのだから、私達は世界中の人々に、核兵器の恐ろしさを伝えていかなくてはなりません」とある人が言っていた。

「あれ?私、日本人なのに何も知らない。」と私は少しはさかしくなった。戦争の話は、国語の授業でいくつか読んでいた。私が一番印象に残っている話は、「ちいちゃんのかげおくり」だ。

このお話は、小さな女の子が見た戦争が書かれていて、空しゅうにより家族がバラバラになり、小さな女の子がたった一人で空腹にたえ生さようとした悲しいお話だった。「もしこの時代に私がいたら同じように生きていただろうか?」と恐怖を感じ、あたりまえに普通の生活が出来ているという事は、幸せな事なのだと学び戦争の恐ろしさを知った。だが私が知っているのは、そこまでだ。

「日本は唯一の被ばく国」という意味がわからなかった。そこで私は第二次世界大戦について調べてみることにした。(中略)原子爆弾について私は、沢山の資料や被爆者の証言を見た。中には目をおおいたくなるような写真もあった。七十七年もの時がたつているのに今でもなお人々を苦しめていると言っている事があった。戦争とは、人々の体を傷つけるだけでなく心にまでも傷をおわせるのだ。

現在も世界では様々な理由により戦争がおこっている。今年二月にはロシアによるウクライナへの軍事しんこうが開始され、大きく報道された。自分の身を守るため、家族を守るため武器を手にとらざるをえない人々が大勢いる。武器を持たない選択は、ないのだろうか?と私は考えた。戦争をなくすためには国と国との問題にせず、世界の問題として話し合う事ができればなにか解決策が出てくるのではないかと私は思う。



3年生の国語で学んだ「ちいちゃんのかげおくり」

戦時中を生きぬいてくれた人達がいるから私達は、平和に生きていけるという事を決して忘れてはいけません。そして、私達は戦争の恐ろしさを伝え続けていく責任があるのだ。世界中で戦争がなくなる日を願ひながら:



「学校で友達と話している時が楽しい」と小林さん

作者のことは 戦争を知ると日常の大切さが分かる

戦争について調べたら、毎日ご飯を食べたり学校に行ったりする何気ない日常が、当たり前じゃないんだと思うようになりました。友達や家族とくだらない話をしながら笑っているのは、幸せなことだと気がきました。それは戦争について知ったから分かったことです。

怖いことを忘れたい気持ちも分かるけど、伝え続けなきゃいけないと思います。戦争のない世界にするために私にできることは伝えることだから、みんなにも知ってほしくて作文にしました。

